



SCB

ニュース&トピックス

No.2026-43

(2026.7.10)

信金中金総研

研究員 西 俊樹

03-5202-7672

s1000790@FacetoFace.ne.jp

信用金庫の収益性

— 総資金利鞘は、政策金利引上げの影響等もあり、上昇傾向 —

ポイント

- 2025年度の全国254信用金庫の総資金利鞘は、前期比0.04ポイント上昇の0.26%となった。また、資金運用利回は前期比0.21ポイント上昇の1.27%、資金調達原価率は前期比0.16ポイント上昇の1.00%となった。
- 信用金庫別に、総資金利鞘、資金運用利回、資金調達原価率の各比率を2期間（2021年度と2025年度）で比較したところ、いずれの比率でも上昇した信用金庫が多い。

本稿では、2025年度の全国254信用金庫の収益性について、以下の各比率により確認する。

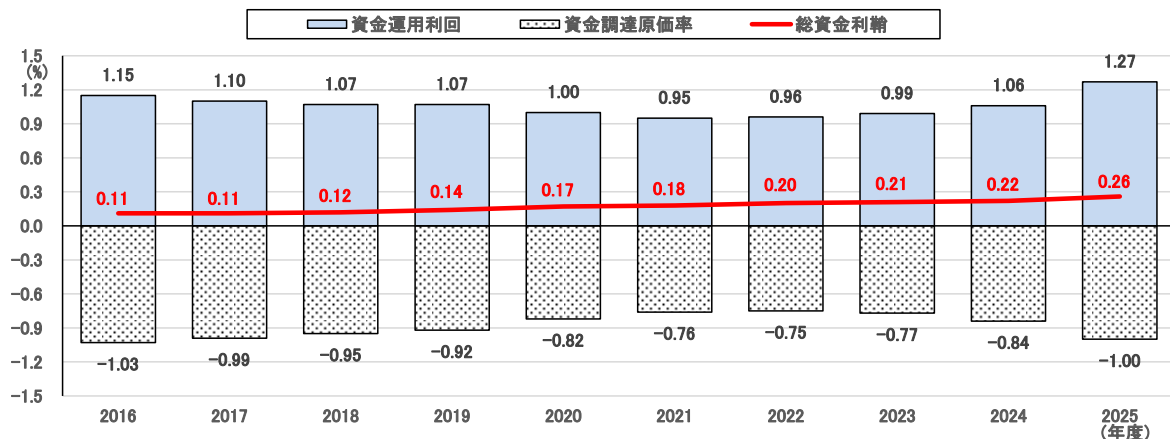
1. 各比率の状況

(1) 総資金利鞘

総資金利鞘（資金運用利回－資金調達原価率）は、前期比0.04ポイント上昇の0.26%となった（図表1）。

資金運用利回の上昇幅が資金調達原価率の上昇幅を上回ったことが背景にある。過去10年間の推移をみると、2018年度以降、総資金利鞘は上昇傾向にある。資金運用利回と資金調達原価率はいずれも低下傾向にあったが、経費率の低下に加え、コロナ禍で預金量が大きく増加したことなどを背景に、資金調達原価率の低下幅が資金運用利回の低下幅を上回っていた。2024年度以降は、日銀による政策金利の引上げの影響等もあり、両比率とも上昇に転じている。

(図表1) 総資金利鞘の推移



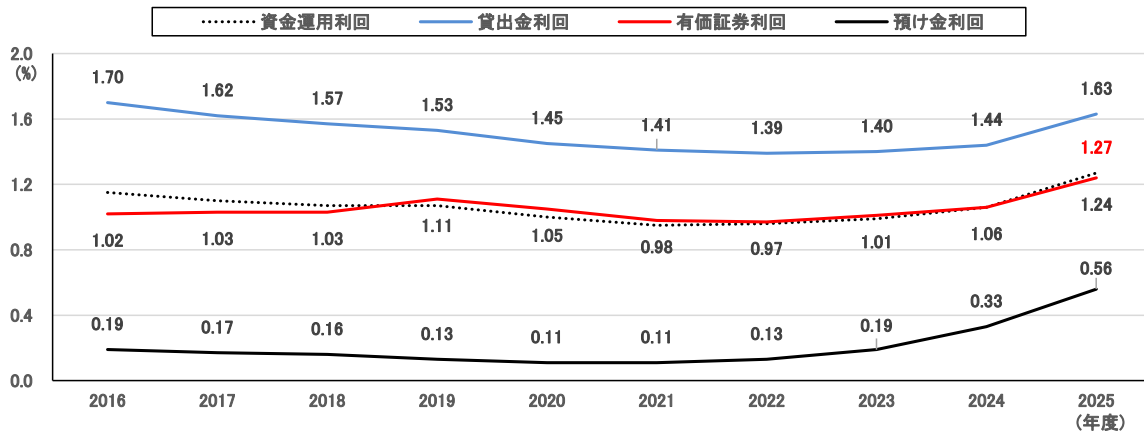
(備考) 信金中金総研作成

(2) 資金運用利回

資金運用利回（資金運用収益/資金運用勘定(平残)）は、前期比 0.21 ポイント上昇の 1.27%となった（図表 2）。

本稿では、資金運用利回を構成する貸出金利回、有価証券利回、預け金利回の動きも踏まえて確認する。過去 10 年間の推移をみると、貸出金利回の低下を主因に、資金運用利回は低下傾向にあったが、2023 年度以降は各比率とも上昇に転じている。特に直近では、日銀による政策金利の引上げの影響等もあり、2024 年度以降、各比率の上昇が資金運用利回の押し上げ要因となっている。

（図表 2） 資金運用利回の推移



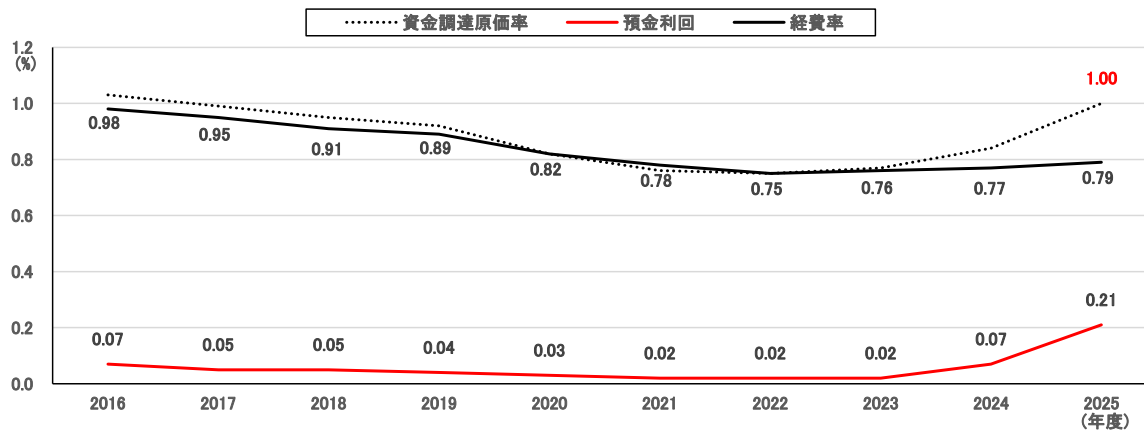
（備考）信金中金総研作成

(3) 資金調達原価率

資金調達原価率（(資金調達費用－金銭の信託運用見合費用＋経費)/資金調達勘定計(平残)）は、前期比 0.16 ポイント上昇の 1.00%となった（図表 3）。

本稿では、資金調達原価率を構成する預金利回、経費率の動きも踏まえて確認する。過去 10 年間の推移をみると、経費率の低下を主因に、資金調達原価率は低下傾向にあったが、2023 年度以降は各比率とも上昇に転じている。なお、2024 年度以降は、日銀による政策金利の引上げの影響等もあり、預金利回が大きく上昇している。

（図表 3） 資金調達原価率の推移



（備考）信金中金総研作成

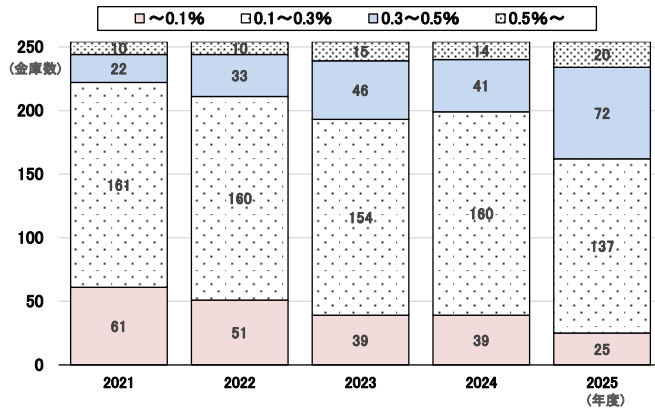
2. 信用金庫別の状況

次に、信用金庫別に最近5年間の各比率の推移を示す（図表4～6）。

(1) 総資金利鞘

0.1%以上～0.3%未満の信用金庫数が最多で推移しているが、2025年度には0.3%以上～0.5%未満の信用金庫数が増加するなど、全体として上昇傾向にある。また、2期間（2021年度と2025年度）で比較したところ、上昇が199金庫、低下が44金庫、変化なしが11金庫となっており、上昇した信用金庫が多い。

（図表4）総資金利鞘

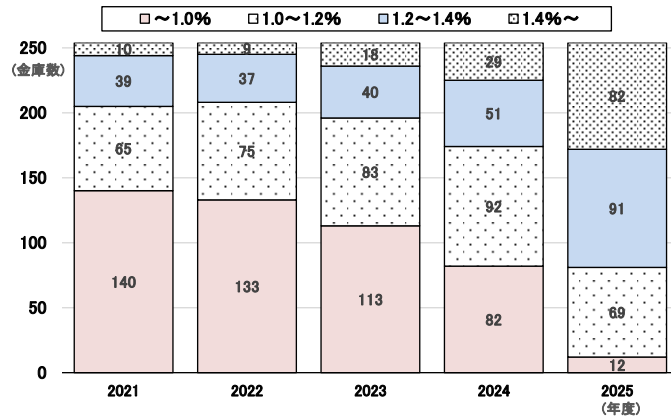


（備考）信金中金総研作成

(2) 資金運用利回

2021年度は1.0%未満の信用金庫数が最多であったが、その後は1.0%以上の信用金庫数が増加するなど、全体として上昇傾向にある。また、2期間（2021年度と2025年度）で比較したところ、上昇が252金庫、低下が1金庫、変化なしが1金庫となっており、上昇した信用金庫が多い。

（図表5）資金運用利回

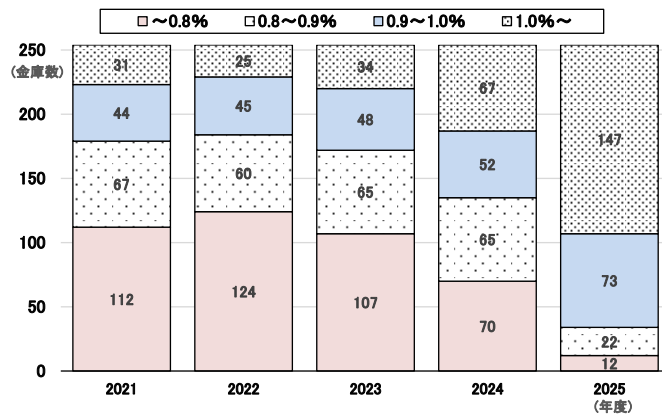


（備考）信金中金総研作成

(3) 資金調達原価率

2021年度は0.8%未満の信用金庫数が最多であったが、2023年度以降は1.0%以上の信用金庫数が増加するなど、全体として上昇傾向にある。また、2期間（2021年度と2025年度）で比較したところ、上昇が253金庫、低下が1金庫となっており、上昇した信用金庫が多い。

（図表6）資金調達原価率



（備考）信金中金総研作成

本稿では、全国の信用金庫の収益性を確認するため、主要な比率の一つである総資金利鞘を取り上げた。

足元の総資金利鞘をみると、日本銀行による政策金利の引上げの影響などにより、資金運用利回、資金調達原価率ともに上昇に転じている。ただし、資金運用利回の上昇幅が資金調達原価率の上昇幅を上回っているため、総資金利鞘は上昇傾向を維持している。

資金運用利回は上昇傾向にあるが、その背景としては、資金運用資産の5割近くを貸出金が占めている点が挙げられる。今後、政策金利の引上げに伴って貸出約定金利の見直しが進めば、資金運用利回のさらなる上昇につながる可能性がある。信用金庫の収益性向上に向けては、良質な貸出資産を積み上げられるかどうかが鍵となる。

一方、資金調達原価率はこれまで低下傾向にあったが、政策金利の引上げに伴う預金利回の上昇により、2024年度以降は上昇傾向にある。今後、日本銀行がさらなる追加利上げに踏み切るとみる向きもあり、預金利回はさらに上昇することが見込まれる。信用金庫には、金利依存を抑制しつつ、顧客との関係性にもとづく預金獲得の方針・目標を明確化することが、これまで以上に求められる。

なお、総資金利鞘は、上昇傾向が続く一方で、信用金庫別に2021年度と2025年度を比較すると、総資金利鞘が上昇していない信用金庫もみられた。その背景として、一部の信用金庫では、資金調達原価率の上昇幅が資金運用利回の上昇幅を上回ったことが挙げられる。今後は、政策金利の引上げ幅次第で、信用金庫の総資金利鞘への影響が一段と大きくなる可能性があるため、留意が必要である。

以 上

※信用金庫業界の各種データは、信金中金総研ホームページの「信用金庫統計」(<https://www.scbri.jp/publication/toukei/>)に掲載されています。併せて、ご活用ください。

本レポートは発表時点における情報提供を目的としており、文章中の意見に関する部分は執筆者個人の見解となります。したがって、投資・施策実施等についてはご自身の判断をお願いします。また、レポート掲載資料は信頼できると考える各種データに基づき作成していますが、当研究所が正確性および完全性を保証するものではありません。なお、記述されている予測または執筆者の見解は予告なしに変更することがありますのでご注意ください。